

ONE LOVE 通信 60号

2017年4月23日発行

春です。でもルワンダには春と呼ばれる季節はありません。一年は約3か月毎の雨季と乾季に分かれます。ルワンダで生活するようになって20年。でもやはり4月と聞くと春を思い浮かべます。私の体内時計はいつまでたっても日本を基準にしているようです。夏の終わりのヒグラシの何となく寂しい鳴き声、コロコロと鳴く虫の声。子供のころは季節から漂ってくる音や匂いをたくさん感じながら育ちました。ルワンダの人たちも雨季と乾季の季節の違いを感じているんだろうなと思いつつ、私はルワンダのそれを、自分でこの先感じることがあるのだろうかと思う今日この頃です。



【ワンラブが成人式を迎えました。】

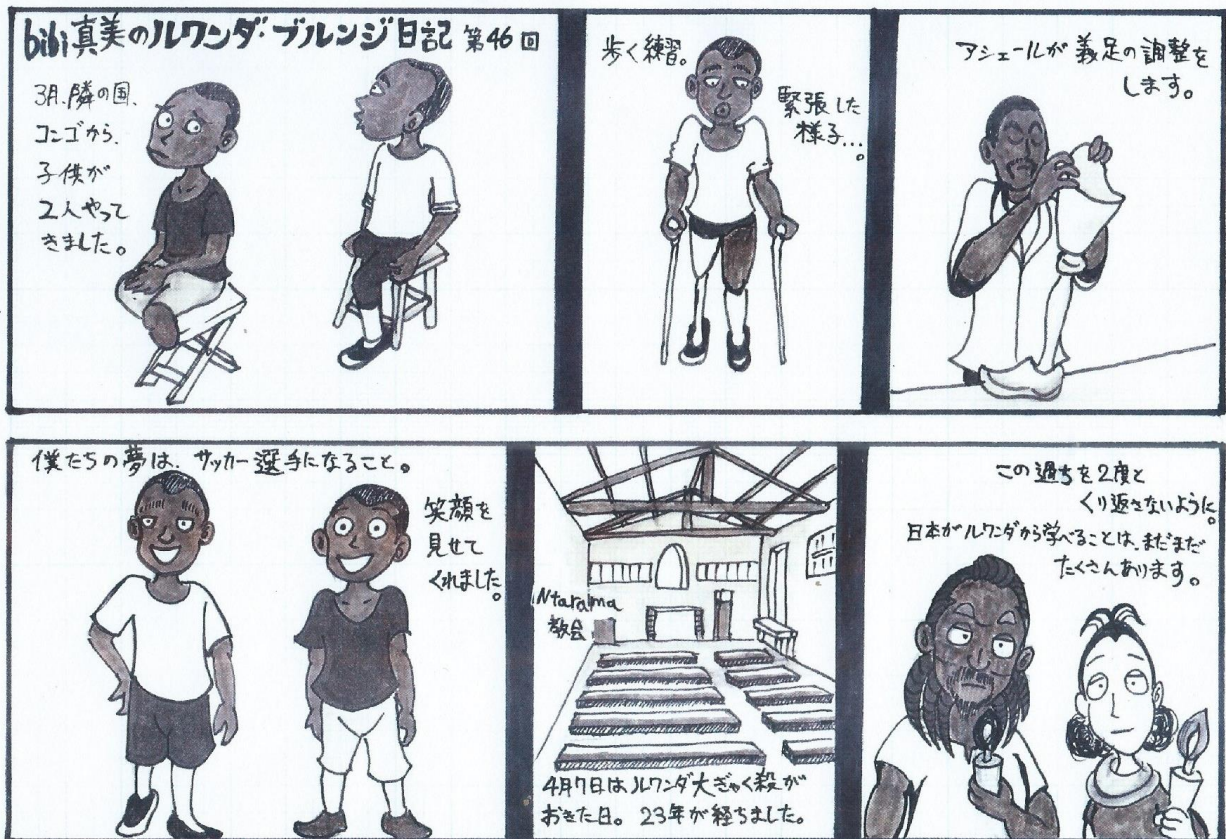
20年前の今ごろ、ルワンダ・キガリ市のニャミランボと呼ばれるイスラムの人たちが住んでいる地域で、私たちは近くに住んでいる子供たちも労力として手伝ってもらいながら、これから開く義肢製作所の工事を進めていました。

バーだったところを改築して出来上がったその場所は、義肢製作所としては使いづらく、そこに行くためには、急な未舗装の坂道を下るので、雨が降ると足に障害を持っている人たちにとっては大変でした。まだ何者でもなかった私たちに、日本人たちは力を貸してくれ、義肢製作所を開くための資金を援助してくれました。97年つまりルワンダ大虐殺から3年。その様子はテレビや新聞で大きく報道されたので、多くの日本人がああ悲劇に関心を持っていました。だから私たちの活動が支援を受けることができたのは、もしかしたらタイミングというものもあったかもしれません。

ごちんまりとまとまったその場所で義足を作りながら、ルワンダ政府に土地を譲ってもらう交渉も進めていました。

この場所では不便ですから…。ガテラはその交渉のために約1年間、エレベータのない建物の5階までえっちらおっちら階段を上り、やっとのことで予想もしなかった広い、ひろーい土地を譲ってもらいました。その土地はあまりにも広く、しかも草ぼうぼう。どこから手をつけてよいのかわかりません。建築資材を買うための十分な予算もありません。だから最初に私たちがやったことは、その場所の土を使ってレンガを作るということ。ちょうどその頃隣の国ザイル（当時）に逃げていたルワンダ人が、ルワンダに戻ってくるタイミングでした。着の身着のまま逃げた人も多かったのも、家もない、仕事もない。そんな彼らの力を借りて、レンガを作りました。

だから今あるワンラブの建物は正真正銘「手作り」なのです。そしてガテラは殺風景な荒地に苗木を植えました。が、私はその時苗木は無駄な出費に思えました。そんなものを買ってくるガテラに文句を言った記憶があります。そんな文句を聞きながら、ガテラは不自由な足で荒地に苗木を植えていました。そしてそれが20年経った今、とても立派な木に育っています。そこにはいろいろな鳥がやっ



てきます。夜はフクロウもやってきます。時にはグアバが実り、それを食べることもできます。

2000年にニャミランボからこのワンラブブランドに義肢製作所を移転し、現在まで続けてきました。ここには義肢製作所、パソコン教室、レストラン・ゲストハウス、そしてホールがあります。義肢製作所は日々義足を作り続け、パソコン教室では障害者が自立のための勉強をし、レストランやゲストハウスにはお客さんが集い、それが活動の資金となっています。ホールは時々結婚式や会議・パーティなどに利用されます。このホールは福島の人たちの資金援助を受け建てられたので、東北大震災があった時にはその前に慰霊碑を作り、ルワンダの人たちとチャリティを行いました。



ニャミランボの義肢製作所、オープンです。今から20年前、私も若くて、気持ちがあっただけで、今も元気です。

ここにはたくさんの思いが詰まっています。うれしかったことも、悲しかったことも、怒ったことも、怒鳴ったことも、泣いたことも、愚痴ったことも、すべて詰まっています(ネガティブな感情が多いのは、全くの本音です…)

いや、しかしあつという間と言えば、あつという間だったし、長かったと言えば、確かに長かったです。この20年の間に、私もガテラもすっかり頑固になりました。児童就労についてあれこれ意見を言われてしまうかもしれないけれど、ワンラブのためにたくさんの未成年の子供たちがかわりました。最初は建築のための荷物を運ぶ単純労働だったのが、段々と仕事を覚え、セメントをこねる役。そしてレンガを積み上げ始め、あるものはセキュリティに、あるものはレストランのキッチンに。こ～んな小さい時から見ていた私としては、そんな彼らの成長した姿を見ると、うれしいです。子供たちの中にはワンラブを去り、車を買って、今はビジネスをやっている人もいます。所帯を持つ、あるいは子供を産んだ女の子もいます。彼らの成長はあまりにも早く、町で会っても気が付かないことも多いです。そんな私に声をかけてくれ、あの時は仕事をくれてありがとうと言ってもらえると、自分の過ごした時間は無駄ではなかったと思うのです。

そして今年3月。ちょうど区切りを迎えたパソコン教室の修了証書授与式を兼ねて、ワンラブの20周年を祝いました。このパソコン教室は JICA から資金を得て、東北福祉大学のプロジェクトとして一緒に行っていた試みで、一旦幕を閉じます(継続予定ですが)。これもまた波乱万丈で、期間中にコーディネータが3人交代するという事態になってしまいましたが、最後に派遣された S 氏は非常に精力的に動き、無事に終了となりました。

東北福祉大から教授も到着し、在ルワンダ日本大使や住

んでいる地区の副市長さんなども参加してくれました。

20年の間に義肢装具士たちも育ちました。たびたび紹介したセザール、彼は2000年のシドニーパラリンピックにはルワンダ初のパラリンピック選手として参加し、その後自分の義肢製作所を開き、今も細々と続けています。エマーブルはキガリ市内に他の義肢装具士と一緒に義肢製作所を開きました。そしてパトリックは情勢不安定なブルンジに義肢製作所を開き、時々ルワンダに戻りながら義足を作っています。唯一の女性ディアネは日本で義足の研修を受けた後、ちょっと自信過剰になってしまい、給料値上げを要求。しかし他のスタッフの手前もあり、要求却下。そのため仕事を辞め、今は結婚して子供を産み、主婦となっています。



この日のために集まったワンラブ卒の義肢装具士。左からアライン(義肢装具士ではありませんが、現在のガテラの補佐)、セザール、ボザス、エマーブル、パトリック。近くにいっても、顔をいっぺんに合わせる機会がないので、セシモニーの後はみんな盛り上がっていました。

ディアネこそ、この3月の式典には参加しなかったものの、その他ワンラブを去って行った義肢装具士たちが一堂に会し、その姿を見たら「ああ、20年経ったんだなあ」とちょっと感慨深かったです。

悲しい思い出もあります。ここを通して知り合ったけど、もうこの世にいない人もいます。ワンラブブランドの建築に携わった人、この人は飲兵衛で、仕事の後に飲むお酒が(仕事中に飲んでいることもあったけど…)楽しみとなっています。酔っぱらうと踊りだし、回りの人たちを楽しませていました。が、千鳥足で歩いているとき車にはねられて、あっけなく死んでしまいました。あとにはまだ幼い子供たちが4人…。彼らが学校に通う費用をワンラブで出したこともありました。仕事帰りに愛人のところに行く途中、交通事故に遭い、無残に足が折れ曲がり、こと切れた亡骸を自分たちの車に乗せ、病院の死体置き場まで運んだこともありました。

あるいはうれしい出来事。ワンラブブランドの建築に関わっていたおじさんが家族を連れて、そこに掘って小屋を作り、住み始めました。そして子供ができ、その子には「ワンラブ」という名前が付けられました。果たしてあの子はどうなっているかな?もう「子」と呼ぶには大きくなりすぎたんだろうな。

悔しい出来事は数限りなく…。建築をしていた時、建築法に則っていないということで、せっかく作った建物を重機を使ってぶち壊されたこと。私は日本にいたので、その様子を目の当たりにしなかったけど、それに立ち会っていたガテラが無念さを抑えて、私に電話をしてきた。ガテラの悔しさは察するに余りある。そして自分たちで立ち上げたルワンダパラリンピック委員会を、よこしまな奴らに乗っ取られたこと。しかも誹謗中傷の記事を新聞に載せられ

…。良かれと思ってやってきたことも、嫉妬深いやつらが
多い世の中、決して順調に進んできたわけではなかったの
です。実際何度悔し涙を飲んだことやら…。

そして数々の義足を作ってきたけれど、みんながみんな、
大切に使ってくれているというわけでもありません。もち
ろん大事に何年も履いてくれる人もいます。でもタダでも
らえるからと適当に扱い、あっという間に壊し、また次の
義足をくれとやってくる輩もいるのです。しかし私たちも
そんなに優しくできない。その人以外にも義足を必要とし
ている人がいるのです。

義足を渡しても、履かないで物乞いをする人もいました。
最近では物乞いをする人たち自体がキガリ市内から見えな
くなっているが、実際に彼らが物乞いをしている姿を見る
ときほど残念なことはありません。受け取るときは「これ
で仕事ができる」と意気揚々と帰っていくけれど、現実
はそんなに甘くないのです。彼らが働ける場はまだ少ない
です。だから物乞いという手段に頼るしかないのです。

そしてたくさんの義肢装具士たちが、ワンラブで勉強を
しました。日本で義肢製作の研修を受けたのは9人になり
ます。先に書いたように独立した義肢装具士、家庭を持っ
た義肢装具士、そしてワンラブを辞めたが仕事もなくブラ
ブラしている人。それぞれが自分で選択した人生を歩ん
でいます。彼らによってたくさんの義足や装具・杖が作られ
ました。うまく出来上がった義足、どうにも仕上がりに納
得がいかなかった義足、一本一本に彼らの喜びと怨念すら
も込められているように思います。今は事務仕事中心の私
も、そのうちまた義足づくりの仕事に復帰したいです。

20年、本当にたくさんの出来事がありました。一生懸
命撮りためていた記録の写真は、2度にわたる洪水の被害

により、最初のころのものはすべてなくなってしまいました
。でもあの時の様子は今も私たちの頭の中に残っていま
す。むしろ写真のなくなってしまった時代の方が、鮮明に
覚えているかもしれません。

日本からご支援をくださった皆さま、どうもありがと
うございました。ワンラブは今年成人式を迎えました。若
気の至りで突っ走っていた20年前。一人の足に障害のある
ルワンダ人に会い、二人の思いを一致させ、ルワンダで
義肢製作所を開くという目的に到達することができました。
でもそれは通過点にすぎません。この活動はこれからもま
だまだ続きます。



皆さま、20年間ありがとうございました。
私の人生の中でこの20年間を過ごす
ことができたのは、幸せだったと思
います。
しかしまだまだ続くのだ。
これからもよろしく～！

ガテラの人生は、ルワンダの大虐殺の歴史に一致します。
その時代を生き延び、今もまだ前に向かっていこうとし
ています。どうぞこれからも末永くご支援ください。

私たちが年老い、腰が曲がり、もっともって頑固になっ
て、人から疎まれつつ引退するのも私たちにちらいかもしれ
ません。そしてそのあとに続く後継者を育てたいという希
望は続いています。多分私もガテラも、体が動かなくなっ
たとしても、多分口出しだけはやかましくすると思います。

この活動の第一号の支援者である、今は亡き私の父、そ



ルワンダ事務所代表ガテラより

【宝はゴミの中に…】

俺は良くお金を拾う。

特になぜか日本にいるときにお金を拾う。ある時は駅のホ
ームで、ある時は散歩している道端で…。もっともそれは大
金というわけではない。大抵小銭である。でも一度など千円
札を拾ったぞ。

真美にそのことを言うと、実にうらやましそうに悔しが
る。なぜあたしの方がず～っと長く日本で生活をしているの
に、お金を拾ったことなどないのだ？と。

そんなことを言われても困るのだ。別に俺だって、いつも
下を向いて、お金を探しながら歩いているわけではない。た
またまふとそこを見ると、お金が落ちているのである。これ
は拾ったというわけではないが、すれ違った車いすに乗った
男性にお金をもらったこともある。しかしもしかしたら俺は
憐れまれたのか…？と思わないわけでもないが…。

とにかく俺はそんなふうに予期せず、お金を手にすること
がある。これって俺が持っている一つの「運」ではないか？
だってどうやら真美にはその運はないようだから…。だから
俺のことを羨ましがらないでくれ。

日本に初めて来たとき、たくさんのまだ使えるゴミが捨て
られていることに驚いた。いわゆる「大ゴミ」と呼ばれるも
のだ。炊飯器やラジオデッキなどの電化製品は、直せばまだ
まだ使えそうである。そんなものを集めて、ルワンダに持っ
て帰った。そしてそれを直して売った。いや、これは決して
ゴミではない。当時のルワンダでは十分に使用に耐えるもの
であった。

初来日の時、真美と神社に行き、おみくじを引いた。そこ
に書いてあったことが、俺の原点だと思っている。

「あなたの宝物はゴミの中に埋もれている」

まさに俺が日本で見たものは、ゴミの中に埋もれている宝
の山だった。

お金を拾ったり、ゴミの中から宝物を見つけたり、ちょっ
とした運に恵まれ、またゴミを別の観点から見ることによ
って、俺の人生は前向きに進んでいると言っても過言ではな
い。だから今でもゴミの山を見ると、つつい何ががあるか覗
いてしまうのである。でもお金が落ちてないかな～とか、金
儲けを考えてゴミの山を執拗に眺めてしまうと、きっとこれ
らの運はあっという間に俺から離れて行ってしまふのだら
う。つまり人間というのは、常にどこか謙虚でいなくちゃい
けないという結論なのである。

して陰からずっと支えてくれた日本の皆さま、ルワンダで私たちに怒鳴られながらも、しゅしゅついてきてくれるスタッフたち、これらのうち誰が欠けても、今のワンラブはなかったと思います。

この先自分たちで何年続けられるかわからないけど、相変わらず「ワンラブは不滅です！」と思っている私たちのことを、蹴っ飛ばしながら応援してくださいね。

【マラリアに倒れたガテラ、その後】

前号で書いた通り、ガテラは日本滞在中にマラリアが発症してしまいました。日本では滅多にない病気だったため、原因を特定するまでに時間がかかり、そのため必要以上に苦しい思いをしたガテラ。本当は私と一緒に1月いっぱい滞在して、活動の話をする予定でしたが、一足先にルワンダに戻り、マラリアの再検査をしました。日本の病院を信用していないわけでは決してないのですが、いかんせん日本のお医者さんには慣れない病気であること、自分の口で症状を訴えられないこと、私の口を通してお医者さんの言っていることを伝えられるという状態だったため、自分できちんと確かめたいと、先に帰ったのであります。

結論としては、ルワンダの病院で採血検査をしてもらい、マラリア無罪放免となりました。しっかり治っていたのです。

皆さまにはご心配をかけてしまいました。ガテラが来ることを楽しみに、活動の話をする場を設けてくださった皆さまには本当に申し訳ございませんでした。

今はもうすっかり元気になり、ルワンダでまた動き回っています。もっとも「元気」というのは適当でなく、バタバタ日々慌ただしいため、疲労困憊状態ではありますが…。

次回日本に行く時期はまだ決まっていませんが、今度は二人で元気な姿で皆さまの元を訪れたいと思います。その時はよろしくねー！

紹介します！ワンラブのスタッフ

ワンラブのレストランの切り盛りをしているアリーネ。3月2日に可愛い男の赤ちゃんを産みました。久しぶりにうれしいニュースです。

ワンラブで働き始めて3年くらい。口数は少ないものの、やることはしっかりやってくれます。

「地球の歩き方」というガイドブックがありますが、その東アフリカ編の中表紙を彼女が飾っています（ちなみにワンラブのことも載せてもらいました）。

最初はレストランのカウンターの中で飲み物の出し入れ、会計を一人でやっていましたが、なかなかしっかり者なので、レストラン運営全般をやらしてもらおうとトレーニングを重ね、今は売り上げチェック・在庫管理・買い出し・スタッフの勤務状況チェックなど、すべてに目を光らせています。実はこういう人材はとても大切で、私たちがルワンダを留守にすると、誰かが管理をしていないと、スタ

ッフはだらけるし、お金をだまし取ろうとあれこれ作戦は練るし、滞在を終えてルワンダに戻ってくるとろくすっぽ利益が出ていないという状況が過去にありました…。だからアリーネをきっちりトレーニングしたのです。

何よりも彼女を信用できるのは、お金をくすねない、嘘をつかない、嫉がなっているということです。これはルワンダで人材を探すときに大事だよ。何度も同じ間違いを指摘したり、ダラダラ働く彼らに何度私は怒りをぶちまけたことが…。

そんなアリーネのおかげで、私たちは今回の日本滞在中も安心して過ごせたのです。

が、そんな彼女が未婚の母になるということで、彼女にこのまま働いてほしい私たちとしては、彼女に逃げられまいとワンラブのゲストハウスに引っ越してきてもらい、そこで出産を迎えてもらおうという魂胆。そうすれば仕事場に行くのはすぐだし、私たちもそばにいるので困ったときは何でも相談に乗れます。

先に書いた20周年の式典を目前に控え、彼女が産気づいた！陣痛なのか、脂汗をにじませているので病院に連れて行き、そのまま入院。明日式典というときに、病院から連絡があり、帝王切開をすると！身近に家族がいないアリーネの親代わりとなったのはガテラ。明日の式典の準備も終わらぬまま、病院で付き添い。なぜか私まで関係ないのに下半身に力を入れ、いきみながら準備を進めていたのである。

で、あっけなく出産。あらまあ、大きな男の子でした。いや、私は子供を産んだことがないので、その愛情というのはよくわからないが、生まれたばかりの赤ん坊はまるで猿のようである。そしてアフリカ人であろうと、まだ色素が沈着していないから(?)白いのである。おもしろいなー。しかもアフリカの子供は生まれながらに筋肉質なのです。赤ちゃん独特の、あの、ブヨブヨした感じではなく、すでに腕に筋肉がついているのだ。だから彼らはあんなにスポーツに秀でているのだな。

赤ちゃんが生まれた3月2日は、そのままガテラは病院に泊まり、翌日の式典を迎えたから、ほとんど徹夜状態だったみたい。



母親になったアリーネ。母は強しというけれど、産むというだけで、表情が俄然しっかりしたように感じます。赤ちゃんの名前はまだ秘密。

このワンラブ通信がみんなの手に届くころ、親戚や友達を呼んで赤ちゃんの命名式をするであろう。元気にでっかく育てよ。この子が成人するのを自分のことのように楽しみにしているガテラは、すっかり運動会のお父さんよろしく、ビデオおじさんになり、彼女の赤ん坊を撮りまくっているのであります。



今号の患者さん

久しぶりに子供の義足を作りました。彼らはルワンダ人ではありません。隣の国コンゴから、ドイツ人の女性に連れられてやってきました。

コンゴは情勢も不安定で、反政府軍がいつもどこかで小競り合いを起こしているような状態です。

彼らの住んでいる村も反政府軍に襲われ、親が殺されてしまいました。幸い命は取り留めたものの、彼らは投げられた手りゅう弾によって足を失いました。



よーし、これからまたサッカーボールを蹴るぞー！と、歩く練習になったら急にシャキッとした少年二人。がんばるのだ！応援してるぞ！

家族を亡くし、また反政府軍が襲ってくるのではという不安を持ったまま、彼らは自分たちで生きていくことを余儀なくされます。そんなところをドイツ人女性に目をとめられ、同じような境遇の子供たちのいる施設に連れていかれました。

義肢製作所に来た彼らはとても不安そうな顔をしていました。ちっとも笑いません。型を採るために義肢装具士のアシエルが話しかけても、ボソッと答えるだけで、目も合わそうとしません。

型を採って数日後、義足の仮合わせの日です。この時は2度目だったので、少し表情もほぐれています。義足を履くためにはズボンを脱がなくてははいけません。恥ずかしいのかTシャツを引っ張って、かわいいマル秘部分を隠します。でもまだモジモジしています。

そしていざ義足を履いて歩く練習となった時、彼らが急にシャキンとしました。自分の足で立ち上がり、ガシガシと歩き始めたのです。そしてあっという間に歩けるようになりました。ちょっと段差のある所でも、へっちゃらです。やはり子供の体力ってすごいな。歩けることを確認した二人の顔は、一気に仏頂面から笑顔に変わりました。

もともと彼らはサッカー少年だったようです。だからもしかしたら一日も早く義足を履いて、またサッカーボールを追いかけたかったのかもしれない。うん、これなら心配ない。きっと彼らはすぐに走り回れるようになる。

子供の成長は早いので、この義足もあっという間に小さくなってしまおうでしょう。ドイツからコンゴに来て、子供たちの支援をしている女性は、成長に合わせてこれからも義足をプレゼントしたいと言い残し、帰っていきました。お願いだから口約束だけにしないでね。義足を履いてこれからも走れるような状態にしてあげてね。

【この頃のルワンダやワンラブ事情】

①ルワンダでも最近はおレオレ詐欺が流行っている。手段や方法は日本のそれとほぼ一緒のようである。つまり家族を装って、お金をだまし取ろうとするのである。ルワンダでお金をやり取りする方法として、携帯電話を使うやり方がある。携帯にいくら分かをチャージし、それを例えば相手の携帯電話に送金するという方法である。

おレオレ詐欺はこの手段を使う。一度に携帯にチャージする金額は大した額ではないので、詐欺にあってもめっちゃくっちゃ大金を取られるというわけではない。が、それでも詐欺は詐欺である。この間この問題に対応する方法をニュースで伝えていた。相手が「息子の〇〇である。今トラブルに巻き込まれた。俺の携帯にお金を送ってくれ」と言ってきたとしても、すぐに信用することなかれ。必ず息子の携帯に電話をかけなおし、本人であるかどうかを確認すべし。全く日本と同じなのだ。あるいは何とかという賞に選ばれました。つきましては牛を一頭もらえるので、あなたの口座情報を教えてくださいとか…。この「牛一頭」というのがいかにもアフリカ的である。

実のところ、彼らがこういうちょっとしたお金をくすねることにかかる情熱は計り知れないと思っている。うちのレストランでもあの手この手を使って、何とか売り上げからお金を抜き取ろうとしたり、あるいは支払いの済んだ領収書をもう一度使って、酔っぱらったお客さんから余分にとろうとか、そんなことばかり考えている。だからそれを阻止するために私は日々目を光らせ、厳しすぎるほどに売り上げやら在庫チェックをしているので、ここからは盗めないと思った従業員はさっさと辞めていく。

きっとこの先おレオレ詐欺もあらゆる進化を遂げつつ、しばらくはいろいろな人が被害に遭うだろうと思うのである。

②地球の歩き方東アフリカ編というガイドブックにワンラブのことが載った。それを見て、少しだけお客さんが増えた。ゲストハウスに泊まる人やレストランで食事をしてくれる人。そして当然義肢製作所のことも書いてあるので、工房見学に来る人もいる。

見てもらえるのはうれしい。それだけ広がっていくから、でも残念ながら困ることもある。それは予定なしに訪れる人たちだ。基本的に私も日中は仕事をしている。その日のうちに仕上げなくてはいけないこともあるので、常にやることだらけの日々だ。そこに突然やってこられると困るのである。対応できないときもある。そんなときは申し訳ないが断ってしまうこともある。

彼らからすれば、遠路はるばる来たのだから見せてくれというところだろうが、そういう予期しない人たちが日々訪れると、その対応に追われ、やるべきことができずストレスとなるということもあるのだ。

ルワンダに来て、ワンラブの義肢製作所を覗きたいと思っている皆さま、いらっしゃる前にぜひご一報ください。ワンラブのことをきちんと説明したうえで、皆さまのご支援をいただきたく思っているので、その点よろしくー！



雑文もろもろ

今回の日本滞在中に、何年かぶりにコンサートに行った。10代20代の頃は洋楽のコンサートに結構通っていたが、ルワンダと関わるようになってそんな楽しみはすっかりなくなってしまった。しかし友人が、桑田佳祐さんの年越しライブのチケットを、ガテラと私の分、取ってくれた。

場所は横浜アリーナ。若いころを思い出して、電車に乗っているときからワクワクした。会場の外はとくろを巻くくらいたくさんのお客さんたち。それを見てびっくりするガテラ。この列に並ばなくちゃいけないのか？とうんざりしているようである。が、ありがたいことに優待券であったため、関係者の入り口からすんなり入れた。

中に入って、さらにびっくりのガテラである。つまりすごーく広いからびっくりなのですね。しかもそれが満席。ルワンダにはこんな大きいコンサートホールはないし、時たまやるコンサートも今一つお客さんの入りが半端で、盛り上がり欠けるのである。

そこで二人が考えたことは、ほぼ同じ。これだけの数のお客さんがチケットを買って入ったとなると、売り上げはいくらになるか？ということだ。すべてが桑田さんの収入になるわけではないが、ものすごい数字だ。コンサート会場で電卓を取り出し、眉間にしわを寄せて語り合う。

そして延々と歌い続ける桑田さん。ルワンダにももちろんミュージシャンはいる。しかし私は思う。「自称」ミュージシャンが多すぎるのだ。つまりプロ意識が少なく、お客さんを喜ばせようという気持ちが弱い。適当にライブをして、適当にギャラをもらおうという輩が多いのだ。そんなミュージシャンばかりを見ているガテラは、3時間ぶっ通して歌い続ける桑田さんの体力と気力に脱帽していた。

忙しく過ぎて行った日本滞在だったけど、このひとは仕事も忘れ、充実していたぞ。

さて20年過ぎたワンラブ。皆さま、本当にご支援ありがとうございました。これからも義足を作りながら、障害を持った人たちの自立に向けて突き進んでいこうと思います。波乱万丈の毎日ですが、皆さまのことを思い浮かべながら、今日も怒り、泣き、叫んでいる私にガッツを与えてくださいませ。

【ご寄付ありがとうございました】

ワンラブ通信59号をお送りしてから今までのご寄付は以下のとおりでした（1月～3月）

1月	円
2月	円
3月	円

このおかげで次の製品を配布することができました。

義足	18本
装具	6本
杖	35本
車いす	2人

皆さまの温かいご支援に、改めて感謝申し上げます。

【書き損じはがき・テレカありませんか？】

書き損じはがき、テレホンカード、商品券などありませんか？年賀状を書こうとたくさん買ってしまっただけのはがきや書き損じはがきなど、ワンラブ通信を発送する際の切手などに換えて利用したいと思いますので、ぜひお譲りください。

【PC教室、ひとまず終了！】

3月中旬に一旦PC教室を閉じました。日本からはこのプロジェクトのためのコーディネータも派遣され、教室がスタート。初めての試みだったので、失敗を繰り返しました。授業の内容については、私はパソコンの素人なので口出しできませんでしたが、運営については結構うるさく言ってしまったかも知れません。そのためか途中、コーディネータが2人辞め、その都度交代要員を探すために、東北福祉大の先生にご迷惑をかけてしまいました。

すべてのコースを終えるためには7か月かかります。授業料なし、送迎バス付とは言っても、ずっと通い続けることは大変です。月曜日から金曜日まで授業ですから。

生徒の中に一人、ちょっと出来の悪い男性がいました。彼は学歴も低く、英語もあまり理解しません。それだけで他の生徒から遅れをとってしまいます。授業にも追いついていくことができず、一度は退学を考えました。でも彼をそうさせたくない理由がありました。

それは他の生徒はなんだかんだ理由をつけて遅刻したり、欠席したりするのに、彼はほぼ毎日確実に授業に来るのです。送迎バスは彼の住んでいるところまで行くわけではありません。バスの待ち合わせ場所まで、彼は2時間かけて歩いてくるのです。しかも彼は足に障害を持っている。都合で送迎バスを出せないときは、さらに2時間かけて学校まで来るのです。

私はその根性を評価したい。今まで勉強をするチャンスがなかったから、それを取り戻してやるくらいの勢いで、彼は通ってきたように思います。私もその根性を見習いたいです。

さてこのPCのプロジェクト、少し形を変えて、今後も続けていきたいと思っています。今は作戦会議中です。しばしお待ちを。

【お願い】

ワンラブ日本事務所は、皆さまのご意見を積極的に取り入れていきたいと思っています。ルワンダ・ブルンジについて知りたいこと、ワンラブに対するご意見等、どしどしお寄せ下さい。

通信発行のお手伝い、イベントのお手伝いなど、相変わらずボランティアも募集しております。またルワンダで中長期のお手伝いをお願いできる方、ぜひご連絡ください。

【おことわり】

- * 発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。
- * 当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはございません。

書き損じハガキ、テレホンカードは下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いております。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町12-28-304 Tel: 080-6564-4448

info@onelove-project.info(日本事務所) onelove@rwanda1.rw(ルワンダ事務所)

郵便振替口座: 00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信60号 2017年4月

発行: ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info/>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

<http://www.onelove-project.org/>

